

## 理想のスポーツクラブに関する研究

中川 保敬・後藤 貴浩\*・真鍋 純子\*・泉 裕二\*

### A Study on the Ideal of a Sports Club

Yasutaka NAKAGAWA, Takahiro GOTOU\*, Junko MANABE\*, Yuuji IZUMI\*

(Received May 23, 1994)

In general, athletic clubs in schools have certain fixed and static ideas about sports and the concept of a team as a club.

The aim in this study is to courage of a sports, and to suggest what the ideal of a sports club, the center of a sport's public image, should be.

We investigated high school and college students to try to find out how the ideal of sports club compares with a sports club in reality, and to suggest what the ideal style or stature of sports club should be.

The results of this study show that :

- There is strong support for the player himself to set his aims in the ideal sports club.
- There is strong support for the player himself to decide his aims in the ideal team.
- There is strong support for the coach to assist in improving the skills of the player.
- There is strong support for the manager to assist the pplayer and the team.

**Key words :** the ideal sports club, team, player, coach, manager

#### 緒 言

現代社会におけるスポーツは、その身体的、精神的効用は言うまでもなく、それ以上にスポーツを通して人々の輪を広げ、人間的絆を深めていくというスポーツコミュニティの形成において、重要な役割を果たしている<sup>1)</sup>。しかし、一方で、学校の運動部に代表されるような、スポーツとはこういうものだ<sup>2)</sup>と固定的一元的に思い込んでいることによる問題やクラブとしてより活動的な意味ある運動にしていく上での様々な問題、例えば、子どもの発育発達や自主性をまったく無視した、指導者の一方的な押しつけ練習や長時間練習、さらに最近のJリーグブームに見られるような商業主義に関わる問題などが存在することも現実である。特に、これまで、日本のスポーツの発展に大きく寄与してきた学校の運動部はその伝統的特質や家族制度的な性質により<sup>2)</sup>、本来、スポーツクラブの持つべき近代的な組織としての役割を果たしていない<sup>3)</sup>と考える、つまり、タテ社会の伝統的運動部は、地位と役割の分化とその分化の明確化された近代的組織集団<sup>4)</sup>という本来のクラブらしさからみると、前近代的な組織といえなくもない面があると考えられる。

また、スポーツがその価値を発揮する場面は、あくまでも自主的自発的スポーツクラブにおいてであり、技術獲得(習得)過程においても自主的自発的に行われることが重要である<sup>5)</sup>。さら

---

\* 熊本大学大学院教育学研究科保健体育専修

に、この自主的自発的スポーツクラブが地域のなかに深く根を下ろし、豊かで、深い人間関係の絆で結ばれて発展していくとき、文化としてのスポーツはその価値を発揮すると考える<sup>6)</sup>。つまり、自主的自発的スポーツクラブとは、好奇心、学習心、探究心などの認知的欲求や自己実現の欲求に動機づけられるスポーツ発現の場であり<sup>4)6)</sup>、自己の人生の豊かさを求めて行なう営みである<sup>7)</sup>。

そこで、本研究では、本来スポーツクラブがもつべき特質を明らかにし、理想のスポーツクラブづくりに必要な諸条件を整理することを目的とするものである。

## 方 法

文献研究及び既存のスポーツクラブを参考に、理想のスポーツクラブのあり方を探り、組織の構成を分類した。さらに、理想的なスポーツクラブのあり方および組織構造の役割を項目化し、それらの項目に対するアンケート調査を実施し分析、考察した。なお、スポーツクラブにおける組織化の視点として、クラブ・チーム（プレーヤー）・コーチ・マネージャー・コーディネーター・オーナーの6つの組織構成を取り上げ、それぞれに理想とすべき項目をつくりあげた。

### ・アンケート調査について

〔実施日〕平成6年3月～4月

〔対 象〕熊本大学陸上部 40名、熊本商科大学附属高校サッカー部 40名  
熊本商科大学附属高校1年4組 46名 合計 126名

〔回収率〕100%

## 結 果

### 1. 理想のスポーツクラブのあり方および構造について

スポーツクラブとは、個人の幸福を目的とするスポーツ集団（クラブ）であり、その中に、スポーツに対する同じ目的を持った複数の集団（チーム）が存在する。またこのクラブには、実際に運動するプレーヤー以外に、プレーヤーを技術的に援助するコーチ、各チーム内に属し、プレーヤーを援助するマネージャー、各チーム間の調整やクラブとオーナーの橋渡しをし、クラブ全体を援助するコーディネーター、さらにこのコーディネーターを介してクラブを援助するオーナーが存在する。

このスポーツクラブでは、自主的自発的な活動がなされ、プレーヤー自身が目標を設定し、共通の規範や地位・役割分担が明確にされている。また、クラブやチームへの加入・脱退は容易であり、プレーヤーの目的に応じた多種目でレベルの違ったいろいろなチームが存在することになる。それを図示すれば、下図1のようである。

さらに理想のスポーツクラブの組織構造については、以下のように考えた。

#### ① クラブについて

スポーツクラブの理想は、個人の幸福を目的とするスポーツ集団であり、プレーヤー・チーム・マネージャー・コーチ・オーナーで構成される自主的自発的な集団である。このクラブへの加入・脱退は容易であるが、地位・役割分担が明確であり、継続性のある集団である。また、基本的に

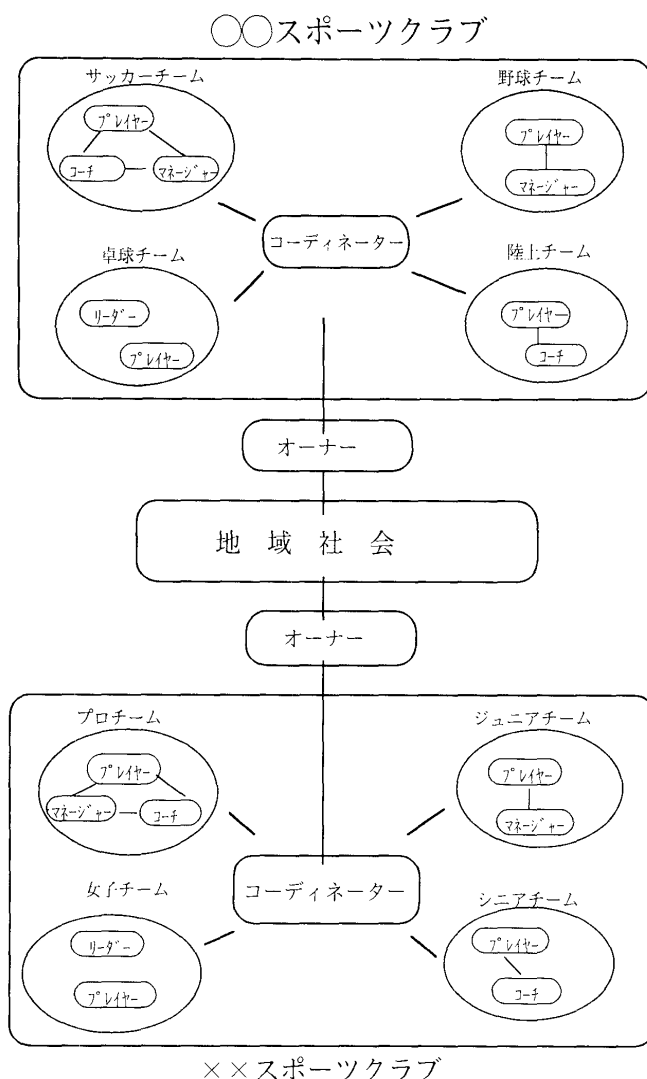


図1 理想のスポーツクラブの組織図

はプレーヤーのやる気に動機づけられた場であり、プレーヤー自身自らが目標を設定する。したがって、このクラブには、目的や技術レベルそして種目に応じた複数のチームが存在すると思われる。

② チームについて

チームの理想は、同じ目的を持つ自主的自発的集団であり、加入・脱退の容易な開放的なチームである。さらに、このチームは、競技出場可能な人数に限り無く近い集団で構成され、チームの中で選ばれたインリーダーが存在し、仲間意識や共通の規範・ルールが存在する。また、そのチームではプレーヤーにやる気や学習能力があり、プレーヤー自らが、目標設定や活動計画の立案、自己評価および他者評価を行なう。さらに、施設・用具の管理、ミーティングの運営は、プレーヤーが自主的に行なうことであるとする。

③ コーチについて

コーチの理想は、チームにおけるアウトリーダーとしての技術向上の援助者である。このコーチはチーム運営に関し、過度の干渉はせず、クラブ内に起きた問題はコーディネーターに提案す

る。また、プレーヤーが望めば、チームの目標決定や練習計画およびミーティングに参加し、練習方法や作戦・戦略について助言する。さらに、マネージャーを通してプレーヤーの健康状態や自チーム、他チームの情報を把握したり、コーチングに関して自己学習し、指導技能の向上を図らなければならないと考える。

#### ④ マネージャーについて

マネージャーの理想は、プレーヤーの代表としてチーム運営に関わったり、コーチとプレーヤーのまとめ役となり、コーチのプレーヤーに対する過度の干渉を防ぐ、プレーヤーおよびチームの代表者である。その仕事内容は、チームの活動場所確保、施設用具管理、チームの計画立案、予算立案、収支管理、決算報告、大会手続き等の事務的工作、年間行事・活動の把握、他チームとの連絡、プレーヤー、チーム、および対戦チームの情報管理など多岐にわたると考える。

#### ⑤ コーディネーターについて

コーディネーターの理想は、プレーヤーの代表としてクラブ運営に関わったり、コーチとオーナーのまとめ役となり、オーナーのチームに対する過度の干渉を防ぐ、プレーヤーの代表者であるとともにチームおよびクラブの代表者でもある。また、チーム間や他クラブとの調整役となる。その仕事内容は、クラブの活動場所確保、施設用具の管理、クラブ内の種々の計画立案・予算立案・収支管理・決算報告、年間活動計画の把握、大会出場等の事務的工作、他クラブとの連絡、ミーティングの企画・運営、自クラブや他クラブの情報管理などであると考えられる。

#### ⑥ オーナーについて

オーナーの理想は、チームの運営に過度の干渉をしないアウトリーダーであり、地域や他クラブとの調整役である。その仕事は、コーディネーターを通してクラブ員や地域住民の要望を聞いたり、地域住民への施設開放・スポーツ教室実施・指導者派遣・クラブ趣旨説明、クラブ員やスポンサー確保、資金運用、会費徴収、施設の準備、表彰、コーチ・マネージャー・指導員研修の実施、指導員の評価が主なものであると考える。

## 2. 調査結果の分析について

理想的なクラブのあり方や組織の中の役割について 88 項目を設定し、それぞれの項目について調査した結果、「非常にそう思う」あるいは「そう思う」と答えた割合が 900%を超える高い支持の項目は、次の項目であった。(図 2)

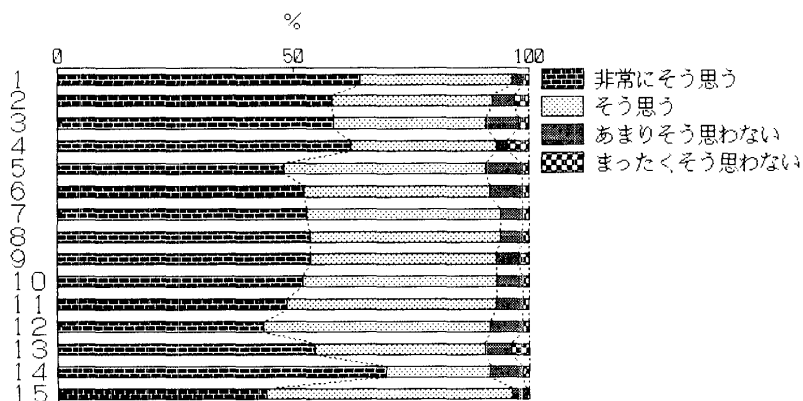


図 2 高い支持を得た項目

- ・スポーツクラブについては、自主的自発的クラブである、プレーヤー自ら目標設定を行なう、プレーヤーのやる気に動機づけられた場であるの3項目であった。
- ・チームについては、インリーダーが存在し仲間意識がある、プレーヤーが目標決定するの2項目であった。
- ・コーチについては、プレーヤーが望めばチームの目標決定に助言する、プレーヤーが望めば練習や試合などの計画立案に参加する、プレーヤーが望めば練習方法に関する助言を行なう、プレーヤーが望めばミーティングに参加し助言する、プレーヤーが望めば、戦略・作戦への助言を行なう、メディカルチェックによりプレーヤーの健康状態を把握する、コーチングに関して自己学習する、技術向上の援助者であるの8項目であった。
- ・マネージャーについては、プレーヤー・チームの援助者である、年間行事・活動を把握するの2項目であった。
- ・コーディネーターやオーナーについては、とくに高い支持は得られなかった。

これらの項目の中で、特にコーチに関する項目は高い支持が多く、このことはコーチに対する要求がかなり高いからだと思われるが、それぞれの項目に『プレーヤーが望めば』という条件が付くことから、あくまでも活動の主体はプレーヤーであると考えられる。また、クラブ・チームに関する項目は図2をみても分かるように、目標設定や活動そのものは「やらされる行為」ではなく「自らがする行為」であると捉えている。

次に、「非常にそう思う」あるいは「そう思う」と答えた人が70%未満の、低い支持の項目について分析、検討を加えていきたい。(図3)

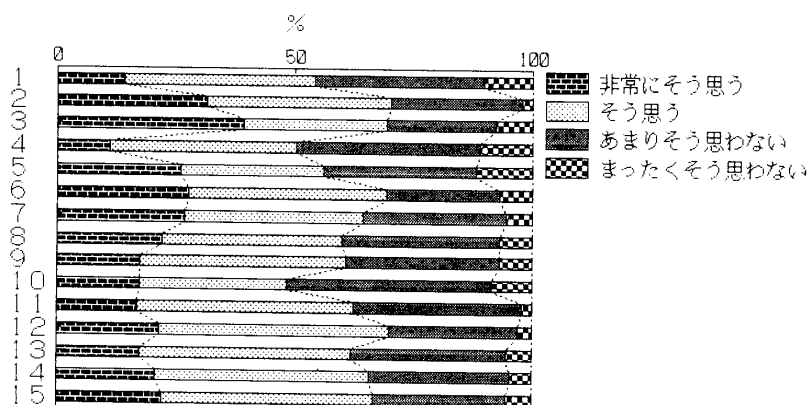


図3 低い支持の項目

- ・スポーツクラブについては、地位・役割分担が明確である、目的に応じた多数のチームを持つ2項目であった。
- ・チームについては、加入脱退が容易で開放的である、各競技出場可能な人数に限りなく近い2項目であった。
- ・コーチについては、アウトリーダーである、チームの運営に対して過度の干渉をしないの2項目であった。
- ・マネージャーについては、プレーヤーとコーチ間のまとめ役である、チームの活動場所の確保を行なう、コーチのプレーヤーに対する過度の干渉を防ぐ、他チームとの連絡を行なうの4項目であった。
- ・コーディネーターについては、施設・設備および用具の管理を行なう、クラブの種々の計画

立案に参加する，ミーティングの企画・運営を行なう，対戦成績などのクラブに関する情報管理を行なう，対戦チームに関する情報管理を行なうの5項目であった。

・オーナーについては，すべて70%以上の支持を得た。

マネージャー，コーディネーターの仕事や役割については，支持の低い項目が多くみられた。このことを，仕事や役割についての理解が現実の活動と一致し考えやすかったため高い支持を得ることが出来たコーチに関する項目と比較すれば，マネージャー，コーディネーターの項目には現実の活動の場面における仕事や役割と，理想としての仕事や役割に大きなギャップがあったと考えられる。また，クラブやチームに関する項目では，そのなかで繰り返し上げられる理想的な活動，たとえば自らが目標設定をすることや自主的自発的な活動であること，あるいはプレイヤーのやる気に動機づけられた場であることについては高い支持を得られた。しかし，チームの人数やチームの数などの組織構成や地位・役割分担の明確化や容易な加入脱退などの組織のあり方そのものについては，低い支持しか得られなかった。

## 考 察

本研究の理想のスポーツクラブの考えに対して，その考え方を支持するかどうかの割合を示す充足率を視点として，低い支持の項目について考察を加え，原因・理由および課題を探り，明確にしていくものである。なお，高い支持を得た項目については理想のスポーツクラブにとって有効な要因項目と考えた。

なお，理想のスポーツクラブ全体に対する充足率を割合(%)で表示した結果については，全体の平均が70.6%であった。また充足率70%を超える割合は，全回答者の69.7%であった。(図4)

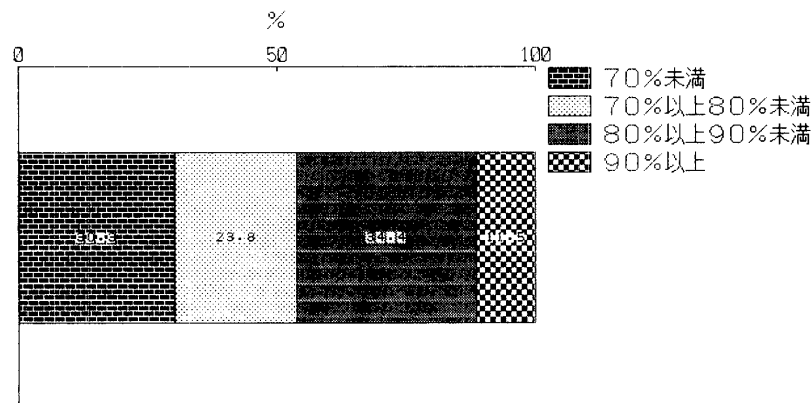


図4 理想のスポーツクラブに対する充足率

上記の充足率を用い全回答者を用い4グループに分け，低い支持の項目(15項目)とクロス集計を行った。その結果，以下の4項目において有意であった。(P<0.05)

- ・マネージャーはプレイヤーとコーチ間のまとめ役である(図5)
- ・マネージャーはチームの活動場所の確保を行なう(図6)
- ・他チームとの連絡はマネージャーを通じて行なう(図7)
- ・コーディネーターはクラブの種々の計画立案に参加する(図8)

この結果から，低い支持の項目のなかでも，マネージャーはプレイヤーとコーチ間のまとめ役

である、マネージャーはチームの活動場所の確保を行なう、他チームとの連絡はマネージャーが行なう、コーディネーターはクラブの種々の計画立案に参加するの4項目は、充足率の高いグループでは肯定的に捉えられた。逆に充足率の低いグループでは否定的に捉えられている傾向がみられた。つまり、充足率の低いグループは、クラブやチームの構造よりも、マネージャーやコー

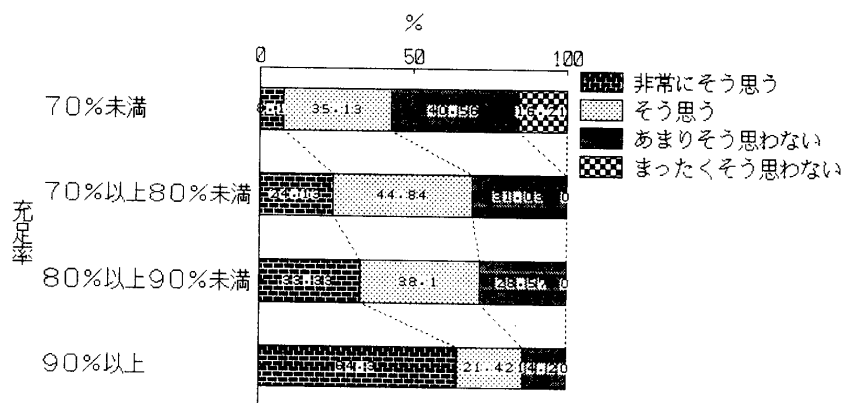


図5 マネージャーはプレーヤーとコーチ間のまとめ役である

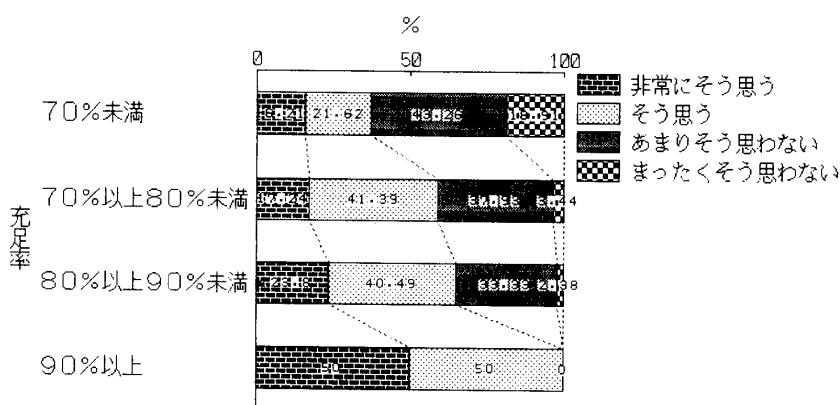


図6 マネージャーはチームの活動場所の確保を行う

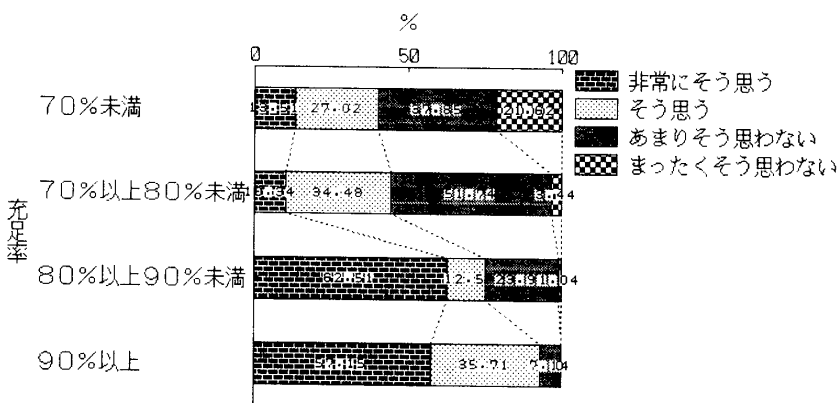


図7 他チームとの連絡はマネージャーを通して行う

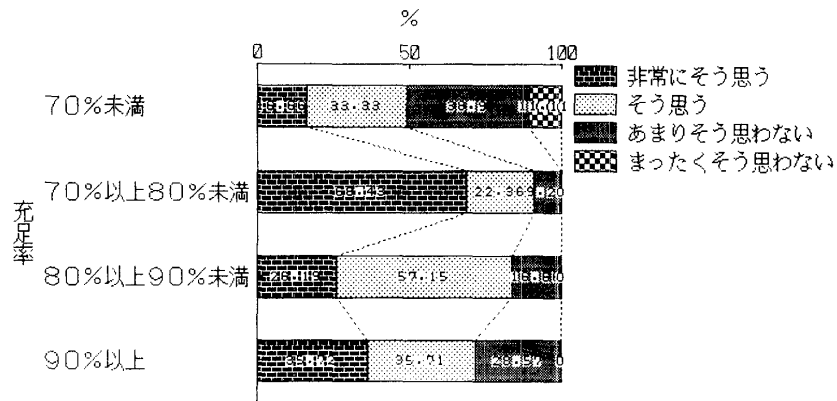


図8 コーディネーターはクラブの種々の計画立案に参加する

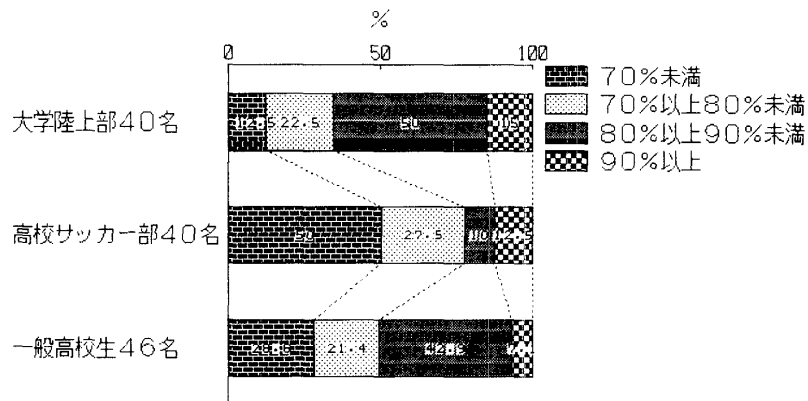


図9 充足率と所属集団

ディネーターの実務的な部分に否定的な傾向がみられる。このことは、現実のマネージャーの仕事内容と、理想として取り上げた仕事内容に大きな開きがあったと考えられる。

また、次に示す充足率と所属集団の違いから分析した結果(図9)、現在の運動行動あるいは所属する運動集団にいかにか大きく影響されているかが分かる。また、この場合における各集団の平均値は、大学陸上部 77.4%、高校サッカー部 63.8%、一般高校生 70.7%と高校サッカー部においてかなり低い数値を示した。

さらに、充足率と有意差の見られた4項目を肯定的回答(非常にそう思う、そう思う)と否定的回答(あまりそう思わない、全くそう思わない)とに分類し、他の項目の回答と有意差のあるものについて検討を加えた。たとえば、低い充足率のグループで、しかもマネージャーはプレーヤーとコーチ間のまとめ役であるという項目に否定的な人達は、表1、表2に示すような項目において有意な差がみられた。(P<0.05)

このことから、理想のスポーツクラブに否定的な回答者は、2つの理由があると考えられる。ひとつは本研究における理想のスポーツクラブの構造そのものに否定的であり、クラブやチームに対する概念やコーチ・マネージャー・コーディネーターの組織内における役割に否定的である傾向がみられることである。つまり、現在のような1クラブに複数のチームが存在しない、しかも競技成績を上げることを目的とした回答者、いわゆる現状のクラブの形態に肯定的な回答者であると考えられる。もうひとつは、マネージャー・コーディネーターの仕事そのもの、つまり実務



表1 「マネージャーは、プレイヤーとコーチ間のまとめ役である」に対して否定的回答者の特徴

| 質問項目   | 傾向    | 有為差判定 |
|--|-------|-------|
| I-4 理想的なクラブとは、加入・脱退が容易で開放的なクラブである              | 否定的   | *     |
| I-7 理想的なクラブとは、目的に応じた多数のチームを持つ                  | 否定的   | *     |
| II-2 理想的なチームとはチームへの加入・脱退が容易で開放的である             | 否定的   | **    |
| II-3 理想的なチームとは、各競技出場可能な人数に限りなく近い               | 否定的   | **    |
| II-6 理想的なチームは、共通の規範・ルールによって運営する                | やや否定的 | *     |
| II-9 理想的なチームでは、プレイヤーが自己評価と他己評価を行う              | やや否定的 | ***   |
| II-11 理想的なチームでは、ミーティングの企画運営はプレイヤーが行う           | やや否定的 | *     |
| IV-2 マネージャーは運動の実践の有無に係わらずプレイヤーの代表としてチームの運営に関わる | やや否定的 | *     |
| V-3 コーディネーターは、コーチとオーナー間のまとめ役である                | 否定的   | *     |
| VI-3 オーナーは、自分のクラブと他のクラブとの調整役である                | 否定的   | ***   |

\*p&lt;0.05 \*\*p&lt;0.01 \*\*\*p&lt;0.001

表2 「マネージャーは、チームの活動場所の確保を行う」に対して否定的回答者の特徴

| 質問項目                                  | 傾向    | 有為差判定 |
|---------------------------------------|-------|-------|
| VI-7 マネージャーは予算立案に参加する                 | 否定的   | *     |
| VI-8 マネージャーは、チームの収支管理を行う              | 否定的   | ***   |
| VI-9 マネージャーは、チームの決算報告を行う              | 否定的   | ***   |
| IV-14 マネージャーは、対戦成績など自分のチームに関する情報管理を行う | やや否定的 | *     |
| V-7 コーディネーターは、予算立案に参加する               | 否定的   | *     |
| V-8 コーディネーターは、チームの収支管理を行う             | やや否定的 | *     |
| V-9 コーディネーターは、チームの決算報告を行う             | やや否定的 | ***   |
| VI-11 オーナーは、スポンサーの確保を行う               | やや否定的 | *     |
| VI-12 オーナーは、資金の運用を行う                  | やや肯定的 | *     |

\*p&lt;0.05 \*\*p&lt;0.01 \*\*\*p&lt;0.001

的な部分に否定的である傾向がみられることである。したがって、回答者は身近にある現実の学校の部活動と比較して、大きくかけ離れたもの、あるいは現実に存在しない仕事や役割について、現実的なズレにより否定的な傾向がみられた。

このことから、現状では捉えづらい、マネージャーやコーディネーター、オーナーについては、理想のスポーツクラブにおけるそれぞれの関係（つながり）や役割について、説明が不十分であり、十分な理解が得られなかったと考えられる。また、現状では、マスコット的あるいは雑用係といったイメージの強いマネージャーに対して、コーチとの間のまとめ役や金銭に関わる重要な事項を任せられないという懸念があったと考えられる。また、現状の高校・大学のクラブでは存在しないコーディネーターについては、1クラブ1チームの学校の部活動しか経験のない学生にとっては理解しがたい役割といえる。したがって、マネージャーやコーディネーターの重要性が十分に理解されるように、さらに役割を明確化する必要がある。

## 結 論

本研究において、理想のスポーツクラブの組織を構造化し、それに必要な諸条件を整備することを目的としてきたが、本研究で作りに上げた理想の項目 88 項目に対して、15 項目において「非常にそう思う」あるいは「そう思う」と答えた人が 90%以上いたことは、これらについて高い評価を受けたと考えられる。このことから、本研究では以下のことが明らかにできたと考える。

- ・プレイヤーが自ら目標設定を行い、プレイヤーの自発性に動機づけられた自主的自発的なクラブである。
- ・コーチは、プレイヤーの意志により、技術、戦略、作戦への助言を行なうとともに、コーチ自ら自己学習を行い、指導技能を高める。
- ・マネージャーはプレイヤーやチームの年間行事や活動を把握する。

さらに、現状では捉えづらい、マネージャーやコーディネーター、オーナーについては、理想のスポーツクラブにおけるそれぞれの関係（つながり）や役割について、説明が不十分であり、十分な理解が得られなかったと考えられる。現状では、マスコット的あるいは雑用係といったイメージの強いマネージャーに対して、コーチとの間のまとめ役や金銭に関わる重要な事項を任せられないという懸念があったと考えられる。また、現状の高校・大学のクラブでは存在しないコーディネーターについては、1クラブ1チームの学校の部活動しか経験のない学生にとっては理解しがたい役割といえる。したがって、マネージャーやコーディネーターの重要性が十分に理解されるように、さらに役割を明確化する必要がある。

以上のようなことから、今後の研究では、所属集団や運動経験の違いによる比較分析をさらに数多く行い、今回支持の低かった項目を再検討するとともに、理想と現実の接点を見だし、実際の地域社会で理想的に機能していくスポーツクラブの組織のあり方を検討していくことを課題としたい。

## 参 考 文 献

- 1) 松村 和則 “地域づくりとスポーツの社会学” I 部 序 (1994 年) 道和書院
- 2) 今橋盛勝・林 量俣・藤田昌士・武藤芳照 “スポーツ「部活」” I 部 (1987 年) 草土文化
- 3) 体育社会学研究会編 “体育とスポーツ集団の社会学” I 部 (1974 年) 道和書院
- 4) 早川武彦：近代スポーツから現代スポーツへの胎動 “スポーツ社会学の新展開” 一橋大学体育共同研究室研究年報 P. 20～P. 24 (1993 年)
- 5) 関 春南：日本スポーツの現状 “転換期のスポーツ” 一橋大学体育共同研究室研究年報 P. 3～P. 10 (1991 年)
- 6) 関 春南：日本スポーツの現状 “転換期のスポーツ” 一橋大学体育共同研究室研究年報 P. 9 (1991 年)
- 7) ルネ・ムスタール “フランスのスポーツ運動” 早川武彦訳 P. 73～P. 80 (1987 年) 青木書店